

## 第2 人を引きつけるあかし人

### 【暗唱聖句】

「わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです。」使徒言行録 4 章 2 節

### 【日曜日・思いも寄らぬあかし人】

ガリラヤ湖南方のヨルダン川沿いにギリシアの 10 の植民地がありました。ガダラ、ゲラサ、スキトポリス、ダマスコ、ディオソ、ヒッポス、フィラデルフィア、ペラ、ラファナの 10 で、総称してデカ（10）ポリス（町）と呼ばれていました。マルコ 5 章に、イエス様が悪霊に取りつかれ墓場に鎖でつながれていたゲラサ人の男性から、悪霊追い出す物語が出てきます。正気を取り戻したゲラサ人の男性は、イエス様にお供したいと申し出ますが、イエス様はそれを許さず、「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにくださったことをことごとく知らせなさい。」（マルコ 5:19）と言われます。このイエス様の言葉の中には、まず毎日心配していただろう家族に救われた喜びを伝えよとの優しさがあります。また、イエス様は自分自身が救われたことを人々に見せることが、何よりも一番効果的な伝道法であることを教えられたのです。実際、このゲラサ人の男性は、ゲラサの町だけでなく、「デカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。」（マルコ 5:20）と書かれてあります。救われた喜びを隠していることなどできなかったのでしょう。

### 【月曜日・復活されたキリストを述べ伝える】

イエス様が十字架で亡くなってから 3 日目の朝、マグダラのマリアとヤコブの母マリア、そしてサロメの 3 人の婦人が、イエス様の遺体に香油を塗るために墓に向かいました。ところが、墓の大きな石が転がされ、中に一人の白い長い衣を着た人が立っていて、こう告げるのを聞くのです。

「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる』と。」マルコ 16:6, 7

驚くべき光景を目の当たりにした 3 人の婦人のうちヤコブの母マリアとサロメの 2 人は、震えあがり、正気を失ったように墓を出て逃げ去り、そして、誰にも、今見たことを言いませんでした。それは「恐ろしかったからである」と書かれてあります。しかし、もう一人のマグダラのマリアは、弟子たちのところに言って、「イエスが生きておられること、そしてマリアがそのイエスを見たことを」を知らせます。しかし、「彼らは、その話を聞いても信じなかった」（マルコ 16:11）とあります。

神様の世界は世の常識を超えています。恐ろしく感じるものがあっても不思議ではありません。また、それを伝えるというのは簡単なことではありません。話した後、どんな反応をされるか考えると、怖くなってしまいう人もいることでしょう。しかし、それでも神様は私たちに伝えるように言われるのです。ただ、福音を述べ伝えても信じてくれない場合のほうがずっと多いです。これは辛いことでしょう。しかし、私たちに委ねられていることは、ただ伝えることなのです。それを信じるかどうかは伝えられた人の問題であり、神様の領域のことであり、また信じるに至るにしても様々なプロセスを通らされる場合が多いのです。

### 【火曜日・変えられた人生は変化をもたらす】

聖霊降下を受けて、初代教会の人たちは劇的に変わりました。その顕著な例が、恐れることなく大胆に福音を述べ伝えるようになったことです。勇気と力強さと共に、聖書に関する知識も増し、語るべき言葉も与えられました。伝道において、聖霊の力がどれほど大切なのかがわかります。聖霊抜きに神様のことを伝えることなどできないのです。ただ私たちが聖霊を用いるのではなく、私たちが聖霊に用いられるのです。だから、神様は自分の力に頼る人を用いることはできません。自分を神様に明け渡すとき初めて、神様は一人ひとりに必要な力や能力、

知恵を下さり、大胆に語っていくことができるようになるのです。

ところで、ペテロたちがこのように大胆に福音を述べ伝えると、それを止めさせようとする力が動きだし、イエスの名を語ってはならないと禁じられます。それに対して、ペテロは全く臆することなく、こういうのです。「神に従わないであなたがたに従うことが、神の前に正しいかどうか、考えてください。わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです。」使徒言行録 4 章 18、19 節  
「見たことや聞いたことを話さないではいられない」。これが伝道の原動力になるのです。

#### 【水曜日・私たちの体験を伝える】

「見たことや聞いたことを話さないではいられない」とペテロは言い、パウロは神様から、「わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしを見たこと、そして、これからわたしが示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人にするためである」と語られたと言っています。結局のところ、わたしたちは人からの借り物ではなく、自分で見て、聞いて、学んで、聞いたこと以外に積極力を持って話すことなどできないのかもしれませんが。また、その見たこと聞いたこととは基本的には過去のことなのですが、常にそれは新鮮であるべきで、それは神様との現在進行形の関係、つまり神様と毎日共に生きることによって生まれてくるものです。日々、神様を見て、神様から聞いて、それが証となって唇からもれてくる。さらに、これから起こる未来のことについても、私たちは聖書の御言葉から話すことができます。再臨の希望や喜びを日々実感しているなら、これから起こる未来のことでも、生き生きと証することができます。

#### 【木曜日・個人的な証】

アグリッパ王はユダヤの一連の王たち、マカベア家とヘロデ家の最後の王です。その王の前で捕えられたパウロが弁明する機会が与えられました。そこでパウロは、「王は、ユダヤ人の慣習も論争点もみなよくご存じ」ですと言って話し始めます。確かにその通りで、同じユダヤ人としてパウロは訴えられた事情はある程度理解していたことでしょう。パウロの弁明は、難しい神学ではなく、自分の人生を振り返り、なぜイエス・キリストを信じるようになり伝道者へと変えられたのかについて、個人的な体験談でした。そして、すべてを聞き終わった後、アグリッパ王はパウロに、「短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか」(使徒 26:28)と言って、席を立ちます。この発言の中に、パウロの言葉に動揺している様子をうかがうことができます。なぜなら、パウロの話はあくまで自分の体験談だからです。そして、自分自身の弁明なのです。しかし、その体験談を聞いて、アグリッパ王は心動かされるものがあったのです。神様との体験談には力があるということです。